

未来を 切り拓く 知恵と学び

今、若者に伝えたい

Hirota Yasuhito

廣田靖人

青山ライブ出版

はじめに

20世紀の歴史にもっとも大きな影響を与えた人物のひとり、と言っている思想家は、こんなことを言っています(※)。

※レーニン『青年同盟の任務』

青年の任務とは、学ぶことである。

まだ社会に出る前の、あるいは社会に出て間もない時期にある若者は、まずなによりも学ばなくてはいけない。

なぜなら、彼らは未来の社会をつくっていく主役である。あるいは、これから主役になろうとしている立場にある。

だから、まずは先人たちが築き上げてきた知識や考え方を学んで自分のものにする必要がある。それをもとに、新しい社会をつくっていく力を養わなければいけない、ということこ

とでしよう。

こう言われると、若い人たちはどう感じるでしようか。

そんなことは当たり前だろう、と思うかもしれませんが。実際に、自分は長く学校で学んできた。今も勉強をしている。あらためて、それが任務だと言われるまでもない、と。

たしかに、そうでしよう。みなさんはこれまで小学校、中学校、高校、大学と勉強をしてきた。

しかし、今までしてきた勉強は、本当に未来の社会をつくっていくために十分だったと言えるでしようか。

あるいは、自分の未来を切り拓くために、今までの勉強で十分だと言えるでしようか。そう言われると、考え込んでしまうのではないかと思えます。

この本は、ある機会に私が大学生のみなさんにした話を元になっています。

テーマは、大きなくくりで言えばキャリア論、ということになるでしょうか。まさに、「これからどんなふうに分身の人生を切り拓いていけばいいだろうか」ということを考えている若い人たちのためのテーマだと言えるでしょう。

私は29歳で起業してから、会社を経営し、さまざまな事業を手掛けてきました。

そんな私の経験が、これから社会に出ようとしている大学生にとって、どのような形で参考になるだろうか。

そんなことを考えながら、私は話す内容を準備しました。

私は経営者ですから、たとえば、「企業が求めるのはどんな人材か」ということを中心に話すことも考えられます（実際、本書のなかにも少し、この話は出てきます）。

「仕事とは」、あるいは「働くこととは」について、真正面から話してもいいでしょう。

起業を目指している学生もいるでしょうから、自分の起業体験談を中心にすえてもよかったですと思います。

しかし結局、私が話した主な内容は、そのどれでもありませんでした。

いかに学ぶか。いかにして自分を成長させていくか。

若い人たちの「任務」である、広い意味での勉強と自己研鑽をどのようにしていけばいいか、という話になったのです。

大学生は、勉強が本業です。特に、昨今の大学生は、昔とは違って講義にもきちんと出席するし、真面目に勉強をしていると言われています。

もちろん、大学に入る以前にも、小学校から高校まで勉強をしてきたでしょう。

といっても、これまでやってきた勉強は、基本的に、知識を頭に入れることが中心の勉強だったはずで。

学校でいい成績をとり、入学試験に合格することを目的とした勉強だったでしょう。

それがいけないというわけではありません。基礎的な学力がなければ始まらないからです。

大切なのは、これまでの勉強を土台にして、これからはいよいよ本当の勉強をはじめるといことです。

つまり、自分の人生を切り拓くための勉強。

そして、これからの社会をつくっていく主役になるための学びです。

「若いうちは勉強が大事だ」

「大学生は勉強をしろ」

と言うだけなら誰でもできます。これだけでは、あまりにも無責任です。

大学生からはじめるべき、本当の勉強とはなにか。自分を成長させるためには何をすべきか。

そのことを、自分の経験にそくして語れないだろうか。私はそう考えました。

私自身は、学生時代だけでなく、卒業して社会人になってからも、ずっと勉強を続けてきました。自分の人生を切り拓くために学び続けてきたつもりです。

だとすれば、自分が何を考え、どんな勉強をしてきたかという経験を、学生のみなさんへのヒントとして語ることはできるはずですよ。

また、私の学生時代の話は、現代の若者たちにとっては興味深いかもしれない。今とは

あまりにも時代が違い、学生たちの考え方や行動もずいぶん違う。それを語ることで、新鮮な驚きと刺激を感じてもらえるかもしれない。そんなことも考えました。

私が今、こうして経営者になっているのは、さまざまな転機、そして人に出会ってきた結果です。

それならば、私のこれまでの人生について語ることも意味があるかもしれない。それぞれの場面で私が何を感じ、考えたか。それを学生のみなさんのこれからの人生に役立ててもらえるかもしれない。

そして、私の人生という具体例を通じて、学ぶことだけでなく、遊ぶことや働くこと、個人と社会の関わり……といったことも含めて、何らかの「人生のヒント」を示すことができるのではないか。

そんな思いから、私は子ども時代から現在までの来し方を話すことにもなりました。

そんなわけで、限られた時間ではありましたが、私の話はかなり幅広い内容を含んでいます。

ここで、簡単に本書の構成と内容を紹介しておきます。

まず、「第1章 人生と転機——寿司職人を目指していた少年が、起業家になるまで」では、私のこれまでの人生、経営者になるに至った人生の転機について述べています。

私という一個人の人生を振り返ることは、同時に私が育ってきた時代を振り返ることもあります。

そのため、この章では戦後の日本がどんな道を歩み、結果として現代がどんな社会になったのかについても語ることにしました。

社会はつねに変化している。だから私たちは学び続けなければいけない、ということ、この章で理解してほしいと思います。

「第2章 時代のニーズ、変化への対応——感性を磨いて成長しよう」は、社会の変化という前提のもと、ではどんな力を身につければいいのかについて語っています。学ぶべきことは何か、についての章だと言えるでしょう。

技術が急速に進歩している現代だからこそ、大切なのはいわば「アナログ」な力です。私が特に重要だと考えているコミュニケーション能力、その土台となる感性の重要性について、この章で説明します。

「第3章 大学時代に何をすべきか——社会に出るためのトレーニングをしよう」は、「どうやって学べばいいのか」の実践的な提言です。

大学以降の学びは、机に向かってする勉強だけでは限りません。旅行をしたり留学したりするのも、映画を観るのも、音楽を聴くのも、絵を観るのも、人と交流するのも、すべてが勉強です。

そして、自分を成長させてくれる体験としては、勉強と同じくらいに遊ぶことも大切です。

こうした多様な活動を含めて、大学時代にどんな行動をしてもらいたいのか、について、具体的に説明しています。

「終章——未来は明るい。行動しよう。」は、若い皆さんへのエールのようなものです。

どれだけ学んでも、どれだけ努力しても、世の中は不確定なもので、将来に対する不安は避けられません。

そんな中で、勇気を持って行動し、自分の未来を切り拓くための姿勢について述べていきます。

ひよんなことから私が学生たちに披露することになった話が、こうして本になり、より多くの若いみなさんの目に触れるのはとてもうれしいことです。そのきっかけを私に提供してくれた新潟大学准教授の西條秀俊先生には深く感謝いたします。

本書が、みなさんがより充実した学生生活を送るために、そしてよりよい人生を歩むために、少しでも役に立つ一冊となることを願っています。

2021年4月 著者

目次

はじめに 3

第1章 人生と転機

寿司職人を目指していた少年が、起業家になるまで **17**

最初に目指した職業は寿司職人 18

不良少年と『13歳のハローワーク』 20

一転、受験勉強漬けの生活に 22

お金と平等——社会に対する意識が目覚める 25

自主運営の修学旅行を企画する 27

「成田闘争」に参加する 30

『竜馬がゆく』とマルクス 32

お前の息子はアカなのか？	36
現代史を学ぶことの大切さ	38
「金の卵」と警備業	41
「物事の必然性」を歴史に学ぶ	45
「いずれは独立しよう」と決意する	46
人材サービスマンとの出会い	48
『ザ・ガードマン』と『ハケンの品格』	51
文化とコミュニケーションという難題	54

第2章 時代のニーズ、変化への対応

感性を磨いて成長しよう 59

変化する社会にどう対応するべきか	60
なぜ、カラオケ店は衰退したのか？	61

第3章 大学時代に何をすべきか

社会に出るためのトレーニングをしよう

79

ロードサイドのショッピングモールは生き残れるのか……………65

社会でのコミュニケーションと感性……………69

「無意識の意識化」からはじめよう……………71

お酒の飲み方にも感性はあらわれる……………76

「おはようございます」の挨拶からはじめよう……………80

感性を磨く行動をしよう……………82

海外経験で視野を広げる……………85

近代史・現代史を学ぼう……………91

映画で学ぶ現代社会……………98

新聞は行間を読む……………104

遊ぶときは「命がけ」で.....	107
時間は平等に過ぎていくことを忘れずに.....	110
生き方の指針を持つとう.....	113

終章 未来は明るい

行動しよう 119

感性、感覚、教養を磨くことが成長の近道.....	120
「つぶれる会社」を見抜けた理由.....	122
不安は誰にでもある.....	125

第 1 章

人生と転機

寿司職人を目指していた少年が、
起業家になるまで

最初に目指した職業は寿司職人

私は昭和34（1959）年4月、新潟生まれです。

大学を卒業後、29歳で「総合フォーラムビジネス」という会社を立ち上げました。今は「テンプスタッフフォーラム」という名前になっている、人材派遣会社です。

以来、さまざまなビジネスをやってきました。

東京でも三和エン지니어リングいう会社をM&Aで取得して、この会社が運営している保育所が12か所あります。

趣味はスキーとゴルフです。

あとでお話することになると思いますが、スキーはかなり本格的に取り組んでいて、2級まで持っています。ゴルフは、昔はシングルにまでなりました。

簡単に自己紹介をすると、私はこんな人間です。

起業家であり、経営者として30年にわたって仕事をしてきた。仕事だけでなく、遊びも

最初に目指した職業は寿司職人

真剣にやってきた、というところです。

まずは、私という人間が、どんなふうにして生きてきたのか、どのように自己形成をしてきたのか、について話してみましよう。若いみなさんが人生を考えるうえでなんらかの参考になるかもしれません。

キャリアプランというたいそうなことに聞こえますが、誰でも小さい子どもの頃から、なんとなく「将来はこんな仕事をしたい」とイメージするものです。

私が最初に目指した職業は、寿司職人でした。というのも、私が子どもの頃、父は寿司屋と割烹料理屋を経営していたからです。

小学生の私は、父の跡を継いで寿司職人に



幼少期、寿司職人だった父と

なって、家業をやっつけていこうとすでに思っていたのです。

まずは中学校を卒業したら、料理の専門学校に入って、板前の修行をするつもりでした。ところが、ここでさっそく転機がおとずれます。

私が小学校の三年生のときだったでしょうか。父が警備会社を起業したのです。

しばらくは寿司屋と割烹もやっていたのですが、数年後には店を畳んでしまった。警備会社に専念することにしたわけです。

そうなると、困ったのは私です。

父の店をついで、寿司職人になるつもりだった私は、はやくも「自分の就職先がなくなる」という経験をするようになったのです。

不良少年と『13歳のハローワーク』

作家の村上龍さんが書いた『13歳のハローワーク』（幻冬舎）という本があります。ベストセラーになりましたから、知っている方も多いでしょう。

一生の仕事を見つけるためには、早い時期から目標を設定して、時間をかけて準備をしていく必要がある。たとえば医師になりたい人は、高校の科目選択から医学部入試を見ずえて考えなければいけない。だから、13歳になったら自分のキャリアについて考えよう。こうした考え方を広げた本で、私も若い人にぜひおすすめしたいと思っっている名著です。

当時の私は、まさに『13歳のハローワーク』状態でした。

小学生、中学生の段階で、自分の将来について考えざるを得なかった。

なんとなく「こうなるのだろうな」と思っていた未来が、ある意味で閉ざされて、自分で新しい道を切り開かざるを得なくなつた。

ここで、さっそく新しい目標を立てて準備をはじめた……と言えれば格好いいのですが、実際はそうではありませんでした。

中学三年生になつた私は、悪い友達と付き合うようになり、学校をさぼっては隠れてタバコを吸つたりするようになりました。まあ、不良少年になつたわけです。

そのまま悪い道に進んでしまう危険性もなかったわけではないと思います。しかし、ここでまたしても転機が訪れました。